

SESSION HOUSE

Annual Report 2010

2011年3月6日発行

「伝承」と「創造」の関わりを 再確認した一年

1991年にオープンしたセッションハウスは2011年で20周年を迎えた。創設以来、「ダンスでつなぐ体の未来」をコンセプトにさまざまなダンス・プログラムを実施し、多くのダンサー達が育ち羽ばたいていっている。

この20年にわたる実践の中で培われてきたことの一つに、育ってきたダンサー達が次の世代への「伝承」を意識した「創造」活動が顕著になってきたことが上げられよう。人と人、世代と世代、時代と時代とあらゆる次元で断絶が指摘される現在、そうした側面に焦点をあててこの一年を振り返ってみたいと思う。

先輩ダンサーから後輩たちへの伝承

20代にセッションハウスで活動を始めたダンサー達も、数多くの舞台経験を積む中で成長し、今や中堅アーティストとして後進を指導する域に達してきている。セッションハウスで誕生し今ではメジャーな活動で東奔西走しているコンドルズを率いる近藤良平も、セッションハウスの人気プログラム「リンゴ企画」の芸術監督をはじめ、後輩を育てることに意識的に力を注ぎ始めている。「リンゴ企画」は毎年、ベテランのダンサーとともに若手を起用し共同作業で作品を創り公演を実施しているが、個々のダンサーの特性をポジティブに生かしていく起用法は、若手ダンサーの持つ未知の力を引き出し育てるものとして教育的な観点からも注目されている。2010年にも11月に『立体絵本・麗しき山羊たち』と題して5回にわたる公演を行ったが、舞台と観客との熱いコール・アンド・レスポンスが行き交う公演形態が海外からも注目され、2011年1月にニューヨークで開催された「日本と東アジアのコンテンポラリーダンス・ショーケース」に招かれ、作品を発表するという出来事があったのも、その成果の一つと言えるだろう。



リンゴ企画「麗しき山羊たち」

継続的な公演活動を通しての伝承

セッションハウスのレジデンス・カンパニーとして1993年の結成以来、継続的な公演活動を行ってきたマドモアゼル・シネマは、レギュラー・メンバーによる公演のほか、ミュージシャンや男性ダンサーなどとも共演。またワークショップやオーディションなどを通して若手ダンサーを起用し、独自のダンス・シアターの創作方法を伝えること

に力を注いできた。2010年3月に実施した『記憶の住人』公演には近藤良平がゲスト出演、8月の『いい子わるい子 子守唄』公演にはNY在住のベリーダンサー椎名葉と若手ダンサー数名が共演、カンパニーにとっても参加者にとってもより開かれた世界へと導くものとなった。また、10月に行った国内巡回公演は、東京をはじめ岡山、福岡で『不思議な場所』を上演し、人々の記憶を基に作品を構築するダンス・シアターを各地に伝える貴重な機会となった。



マドモアゼル・シネマ「不思議な場所」

海外のダンサーからの伝承

セッションハウスでは1999年以来、ピナ・バウシュが率いるヴァパタル舞踊団の古参ダンサー、ジャン＝ローラン・サスポーテスが毎夏ワークショップを開講し、参加者一人ひとりの個性や持ち味を生かした公演を実施してきた。2010年も19名のダンサーや演劇役者が参加して16日間にわたるワークショップと公演を行ったが、今回はピナ・バウシュが創案したダンス・シアターの方法をこれまで以上に明確にした振付・演出を行ったのには目を見張るものがあった。ダンス界の巨星と言われたピナ・バウシュが急逝してから一年有余、彼女が創作した幾多の作品群は残されたダンサー達に引き継がれ、舞踊団の活動は変わることなく続いているが、サスポーテス氏自身もピナの遺志を受け継いでいくことを明言。稀代の振付家ピナの創作法を日本のダンサーに伝えていくことを意識的に選択し始めたことは、今後につながる新たな挑戦として期待されるものと言えるだろう。



ジャン・ローラン・サスポーテス
WS公演「The Waltz of Life」

以上の他2010年には、1997年に始まったノンセレクトの公募公演「シアター 21 フェス」をはじめ、「咲いた咲いた ダンス花」、「レジデンス・アーティスト公演」などのセレクト公演、ダンサー企画を制作面でサポートする「D-zone公演」、大学生ダンサーによる「UDC公演」など、総計38企画(63日間)を実施し、多彩な作品で賑わいを見せた一年となった。

レジデンス・アーティスト笠井瑞丈 父・叡氏と真向勝負のセッション

「伝承」という視点から2010年度の活動を振り返ってみる時、父から子への伝承として特異な組み合わせとなったものに、12月に行われたレジデンス・アーティスト笠井瑞丈の『対』と題した公演がある。笠井瑞丈は1998年、セッションハウスで「春の雪」という作品で鮮烈なソロ・デビューをしたダンサーだが、海外を含め数多くの舞台経験を積み上げてきた彼が単独公演の相手として選んだのが父親の笠井叡だった。叡氏は言わずと知れた1960年代から活躍し続けている舞踏の創始者の一人。いまなお、ソロ活動のほか外国や日本のダンサー達に振付けたり共演したりと、そのエネルギー溢るダンス力は衰えるところを知らない。12月の公演は父と子が本格的に1対1で対峙するというもので、激しく挑発する父親と冷静に向き合う息子のセッションは、異世代をつなぐ真向勝負のセッションとして記憶に残るものとなった。父から子への伝承に触れた2人の話を公演後のアフター・トークから抜粋で紹介する。

(M=瑞丈、A=叡)

Q: お父さんと瑞丈さんが本格的にやるのは初めてだったとか?

M: セッションハウスでソロ公演を初めてやる前年の1996年に、サンフランシスコで舞踏フェスティバルがあって、その時に叡さんに振付けてもらってやったことがあります。それ以外に20分ぐらいの作品を愛知の方でやったことがあって、厳密にいうと初めてではないけれど、1時間の公演として一緒にやるのは初めてです。

Q: 今回の公演チラシにはお父さんの台詞として「上等買ってやるよその喧嘩」と書いてありますが、息子さんからそういう挑戦状を突きつけられてどうでしたか?

A: それはきついことでしたが、瑞丈がそういう希望を持っているのであれば、やるのもいいかなと思って。実際にやってみると、結構楽しくやれましたね。

Q: 瑞丈さんは実際にお父さんとやってみて、どうでしたか?

M: いやあ、きつかったですね。リハーサルやっていて俺、恐ろしいことしてるなっていう感じでした。最初は呼吸とか肉体的にもつらくて、1時間も叡さんと踊るのは無理だになっていう感じでした。でも週に何回か、1時間ぐらいの短い時間集中してやっているうちに、楽しくなりました。

Q: 瑞丈さんのお兄さんの禮示さんもオイリュトミーをやっていて2人の息子さんがダンスに関わっていますけれど、父親の立場として息子さんたちがダンスをやるということ、希望していたみたいなどはあったのですか?

A: 希望していたことはなかったですね。ないんだけど、自分の道を見つけるっていうのが一番大事ですから、その道が結果としてダンスだったら、それはそれでいいと思っています。

Q: 今回瑞丈さんに公演当日に配るプログラムに載せる言葉を頼んだら、「叡さんへの積年の恨みをはらしたい」と書いてきたので、びっくりしてそのまま印刷していいのかわかりませんでした。だけど「恨み」という言葉を調べてみると、韓国では「恨(ハン)」と言って、これは日本の植民地支配への抵抗の言葉でもあるけれど、いろんな含蓄のある言葉なんですね。「羨望の思い」といった意味もあるし「恥じらい」といった意味もあるらしい。瑞丈さんはどんな思いでその言葉を使ったんですか?

M: 伊藤さんから電話がかかってきて、本当にこれでいいのって聞かれ、「恨み」という言葉にそういう意味があるのは知らなかったけれど、「恨み」というのはただ単に字義通りの「恨み」ということだけではなくて、逆に「感謝の気持ち」などいろんな意味もあって、それをストレートに書くのもちょっと厭だからって



いうのがありました。ですから「恨み」という言葉にやはりいろんな想いが入ってはいますね。

A: 私はいい言葉だと思いました。そうとう苛めましたからね、人間としてもいろいろと。恨まれても仕様がなと思いますよ。

Q: やはりそこには父親と息子という関係からくるものもあるんでしょうか?

A: たぶん人間関係の中であかの他人だったら厭になれば別れりゃいいし、恋人だって夫婦だって別れりゃいいけれど、親子ってそうはいかないじゃない。引き受けざるをえないという、いちばんその人間関係の中では微妙だし複雑だし、それだけにはらむものは大きいと思うんですけど、そういうものを抱えてダンスするっていうのは、結構スリリングではありますね。今回1回で勝負っていう感じにしたいけど、でもそうはいかないかな?やはり親子というのは深いですね。友達だと「ああそうだね、うんうん」でいいけれど、そういかないものがある。親子関係ってというのは不思議なものです。

Q: 瑞丈さんは「お父さん」とは決して言わない。「叡さん」と言うんでしょう?

A: それはね、おぎゃあと生まれた時に父親と子供という関係はやめて友達関係でいきたいという思いがあったからですね。それでいい感じでいけるかなとずっと思っていたんですけど、瑞丈が30歳を過ぎてからかな、ひよっとすると自分は親子関係から逃げていたのかなあという気がしましてね。改めて突き詰められたような気がして、もう一回関係を修復してみたいなという感じがあったんですね。

Q: 遅れてきた親子関係?

A: そう、そう。このままいくんだろうと思ってたけれど、3人の息子、皆30過ぎてからそうはいかなくなった。ですから今いちばんきついですよ。

Q: お父さん、叡さんは1960年代からずっと現役で踊ってこられていますが、遅れてきた親子関係だと言っても現役ダンサー同士として、世代を越えてライブ意識みたいなものはありますか?

A: 正直言ってありますね。生まれた瞬間から、こいつはなんか俺を越えようとする人間だなみたいな感じがして、それでお前なんかって行って蹴飛ばしてました。いじめてましたね。(笑い)

Q: 今日舞台で蹴飛ばしましたね。昨日のリハーサルの時なんか本気で蹴飛ばしていたように見えましたね。

M: 痛くてしょうがない。(笑い)

Q: 今回作品の中に戦争をイメージしたところもあって、瑞丈さんが上等兵の軍服を着て踊っているし、叡さんは従軍慰安婦のような着物姿で踊っていますが、だからといって演劇のようなテーマがあるわけではないけれど、そんなことからお父さんとして若い瑞丈君にあの戦争の時代の何か伝えたいという思いみたいなものがあったのでしょうか?

A: 彼にも戦争体験みたいなのは見聞きして体に入っていると思うので、それを共通の意識にして「対」という関係を作ろうとは話し合っていたんです。私がダンスの中で戦争を扱ったのは初めてですが、親子というだけでなく世代の「対」とか、そういうものも含めたいと思って、ああいう作品になったように思います。

Q: 今回は瑞丈さんとでしたが、最近黒田育世さんのパティックやドイツのダンサーなど若い人達によく振付けをしていらっしゃるんですね。これから瑞丈さん含め何か若いダンサー達に伝えていきたいというものがありますか?

A: それはものすごくありますね。あるけれども、こういうものは口ではなかなか言えない。言えないけれど、伝えたいというのか、やっぱり何だろうな。はっきり言って今はダンスしかないと私は感じているんですよ。コンピューターが全部やってくる文化の中で、ダンスがこれからどういふふうにならっていくのかなあと、自分にも問い詰められるところがあるんですけど、50年近く踊ってきた中で今の時代というのは、すごくダンスとの結びつきが強くなってきただけに、伝えていきたいというか共に一つのものを歩んでいきたいという思いはありますね。

台頭めざましい若手ダンサーたち

池野 恵(舞踊批評)

ゼロ年代が過去となり、新たな時代に突入した2010年のセッションハウスで行われた公演をざっと振り返ってみると、まず顕著なのは外来公演がなくなったことだ。2008年以降の世界同時不況と呼ばれる経済危機の影響が、いよいよ芸術分野に影響を及ぼしていることを切実に感じる。さて、その代わって目につくのが若いアーティストたちの台頭である。

まず、ノンセレクト企画の中でも最上位の「D-zone」で1月末に『Digitalis』を披露した長内裕美は、その1か月後に横浜ダンスコレクションR2010「若手振付家のための在日フランス大使館賞」「MASDANZA-EU賞」をダブル受賞。フランス、スペインをはじめとする海外のプログラム・ディレクターから、揃って高い評価を得たのは何とも頼もしい。

「シアター 21」をはじめとするノンセレクト企画は、何組かの出演者で構成されるが、この「D-zone」は単独公演が原則。近年、若いアーティストの発表の場は広がりつつあるものの、そのほとんどが数十分の作品で、1人ないしは1組で一晩もののプログラムが組めるほどの作品が創られていないのが現状だ。新人から中堅へとステップアップするための仕組み作りが機能することが必須であり「D-zone」はその役割を立派に果たしていると言える。大学生であることが条件の「ユニバーシティ・ダンス・クロス」から「シアター21」、さらには「ダンスパッケージ(ダンス専科)」、再演の機会を与える「ダンス花」まで、レヴェルに応じた複数の企画が積み重なり、それがこうした成果に繋がっているとの確信を深めた。

また、コンドルズ率いる近藤良平のダンス革命「リング企画・立体絵本」では、観客との接点を意識したユニークな公演の数々が誕生している。そのひとつ11月下旬に行われた『麗しき山羊』では、近藤と藤田善宏に加え、井上バレエ団の元プリマ・バレリーナ、井神さゆりを交える等意外性のあるキャスティングが新鮮だった。この公演に参加の鈴木拓朗が、横浜ダンスコレクションEX2011「新人振付家部門」(コンペティションII)で奨励賞を獲得したのは快挙。観客の笑いが絶えないエンターテインメント性を評価、との審査員の講評に思わず納得した。次世代の支援と交流事業の強化を謳う今回のコンペで新しい部門が創設されたことは、セッションハウスに集う若いアーティストにとって、大きな励みとなるだろう。2011年5月には「D-zone」に登場する鈴木さんのさらなる飛躍を期待したい。

横浜ダンスコレクションがらみでは、ほかに昨年のソロ×デュオ<コンペ>+特別賞に輝いた笠井瑞丈が、12月にレジデンス・アーティスト公演『対』で笠井 叡と親子共演を果たしたのが印象深かった。生きた伝説の領域に近づきつつも、その驚異的な若々しさをで圧倒する父親に対峙し、正面から挑む姿は清々しく、米国での研修を経て着実に成長したことを実感した。

賞に繋がることだけが活動の意義ではないが、最後にもう1人挙げておきたい。10月のレジデンス・アーティスト公演『3』で、三浦宏之、アンディ・ウォン×松本大樹ら過去のレジデントたちと同窓会よろしく顔を合わせた富野幸緒は、この時上演した『TIARA THE BEAUTY ~ 眠らない、美女』で2011年1月「ダンスがみたい!新人シリーズ9」のオーディエンス賞を獲得。今夏、日暮里d-倉庫での本シリーズへの出演が決まっている。

アーティストの育成には、それなりの時間と労力がかかるもの。今日コンテンツラリー・ダンスのコンペが盛んなことは結構だが、それを支えているのは、実はセッションハウスをはじめとするいくつかの拠点での、こうした地道な活動であることを多くの人に知ってほしい。



富野幸緒
『TIARA THE BEAUTY ~ 眠らない、美女』

2010年 ダンスプログラムの軌跡

1月	10-11日	「シアター 21 フェス vol. 79」(1回公演) D-zone リレー① ねねむ公演「ぼ」(2回公演) 出演: 坂垣あすか、元、須永朝子、史、陽茂弥
	16日	
	23日	「シアター 21 フェス Step Up Vol. 27」(2回公演)
	30日	D-zone リレー② 長内裕美ソロ公演「ジギタリス」(2回公演)
2月	6-7日	「シアター 21 フェス vol. 70」(1回公演)
	13-14日	D-zone リレー③ まるラボ公演「ネバー・ランディング・ドリーム」(3回公演) 出演: 越智由美子、松岡綾葉、山崎由香、MA-SA ほか
	20-21日	D-zone リレー④ 犬飼グループ「STYLE ~ 5 for it ~」(3回公演) 出演: 犬飼奈歩子、伊豫部利香、奥宮さやか、piroco、今井香、田中綾、なをえ、土屋結奈、今野友萌ほか
	20-27-28日	レジデンス・アーティスト 川口隆夫ワークショップ&パフォーマンス 「動くポリヘドロン~私の目に映るもの」 ※2F ガーデンで実施(5回公演)
	27日	「シアター 21 フェス Step Up vol. 28」(2回公演)
3月	6-7日	マドモアゼル・シネマ「記憶の住人」(3回公演) ゲスト出演: 近藤良平
	13-14日	UDC 9th「おちないんです」(3回公演) 全国の13大学から60名が参加
	27日	D-zone リレー⑤ 「れみふあ装」(2回公演) 出演: 石和田尚子、江角由加、長沼陽子、佐藤和史、笠井晴子、菅彩夏
4月	3日	「ダンス専科」(2回公演) 出演: ダンスクラス受講生
	10日	「シアター 21 フェス Step up vol. 29」(2回公演)
	17日	「シアター 21 フェス Step up vol. 30」(2回公演)
	18-24-25日	尾本安代こどもバレエ発表会(3回公演)
5月	15-16日	「シアター 21 フェス vol. 80」(2回公演)
	22-23日	D-zone「夏メロ・残る若さがジャマをする」(3回公演) 出演: 山口夏絵、米沢倫子、藤原まさこ、花田雅美、清水良子、ノリエ・ハマナカ、小森里子、楠美奈生、天方真帆
	29日	「シアター 21 フェス Step up vol. 31」
6月	12日	「咲いた 咲いた ダンス花 vol. 11」 日女体祭り①(2回公演) 出演: SALATO.nic.ULTRA9, 松尾愛美、村上美希
	19-20日	「咲いた 咲いた ダンス花 vol. 11」 日女体祭り②(3回公演) 出演: 大島菜央、尾形直子、星野琴美、伊藤知奈美・三東瑠璃、OTAKARA、バギ、ホコベン舞子
	26日	「咲いた 咲いた ダンス花 vol. 11」 UDC ユニオン(2回公演) 出演: 藤原治、吉村和顕、黒田なつこ、井田亜彩実、木原寛子、国枝昌人、佐々木さやか、塩野入一、竹森徳秀、中村春、香取直登
7月	3-4-11日	「シアター 21 フェス vol. 81」(3回公演)
	24日	「シアター 21 フェス Step up vol. 32」(2回公演)
	31-8/1日	マドモアゼル・シネマ 旅は道連れ「いい子 わるい子 子守唄」(3回公演) ゲスト出演: 椎名葉
8月	28-29日	ジャン・ローラン・サスポーテスのワークショップ生による公演 レジデンス・アーティスト公演として実施(3回公演)19名出演
9月	11-12日	「シアター 21 フェス vol. 82」(1回公演)
	16-17日	マドモアゼル・シネマ 鳥の演劇祭シヨークケース参加 「赤い花 白い花」/ 鹿野往来交流館(鳥取市鹿野町)(2回公演)
	18日	「シアター 21 フェス Step Up vol. 33」(2回公演)
	20日	「咲いた 咲いた ダンス花 vol. 12」(2回公演) 出演: ふたりごと、仙人のおしり、モモ、加藤紗希・杉山恵里香、青柳ひづる、井田亜彩実
	25-26日	D-zone JUGON 公演「濡標~みおつくし~」(3回公演) 出演: 岡本はる香、下平京子、石橋忠士、梅沢多賀子、梅田めぐみ、浜あゆみ
10月	2-3日	「シアター 21 フェス ADVANCE vol. 2」(3回公演)
	9-10日	レジデンス・アーティスト公演「3」(3回公演) 富野幸緒、三浦宏之、アンディ・ウォン、松本大樹
	23日~29日	マドモアゼル・シネマ国内巡回公演「不思議な場所」 セッションハウス、西川アイプラザ(岡山)、ほんプラザ(福岡)(5回公演) 出演: 村雲敦子、相原美紀、竹之下たみみ、伊達麻衣子、大島菜央、伊藤菜野、佐々木さやか 映像: 梶村昌世
	30-31日	D-zone 刹那舞踊団公演(3回公演) 出演: 米川毅、米川千津子、森政博、権平美恵子、柿崎純子、引間麻美
11月	6-7日	スペシャル・プログラム 「坂東扇菊公演~真夏の忠臣蔵」(3回公演) 出演者: 坂東扇菊、近藤良平、藤田善宏、鎌倉道彦ほか
	20-21-23日	リング企画 2010 立体絵本「麗しき山羊たち」(5回公演) 出演者: 近藤良平、井神さゆり、藤田善宏、鈴木拓朗、中村春、福泉陽香、安田有吾
12月	25-26日	レジデンス・アーティスト公演 「対」笠井瑞丈、笠井叡(2回公演)

マドモアゼル・シネマ 17年目の挑戦 新たな観客との出会い

セッションハウスのレジデンス・カンパニー“マドモアゼル・シネマ”（振付・演出：伊藤直子）は1993年の結成以来17年目を迎えた2010年、国内巡回公演などさまざまな形態による公演に挑戦し、新たな出会いの一年となった。

3月に2日間にわたって行った『記憶の住人』は、2007年に逝去したカンパニーの軸的ダンサーだった野和田恵里花さんと共有してきたダンスの記憶を蘇らせて構築した作品による公演。踊ることが大好きだった彼女のダンス心を後輩ダンサーたちに伝承していくものとして、踊る者、見る者にさまざまな想いを抱かせるものとなった。



近藤良平との共演シーン

作品の中には映像に残る恵里花さんも登場してライブのダンス・シーンとクロスしたり、ゲスト・ダンサーとして近藤良平が参加、セッションハウスで初演の後全国各地を廻って評判となった彼女とのデュエット作品『小さな恋のメロディー』の1シーンをマドモアゼル・シネマのダンサーたちと踊るなど、サプライズいっぱいの公演としてカンパニーの一時代を画する公演となった。

当カンパニーは8月、「旅は道連れプロジェクト」として、6名のレギュラー・メンバーにオーディションで選んだ7名のダンサーを加えるとともに、ニューヨーク在住のベリー・ダンサー椎名葉をゲストに迎えて、『いい子わるい子子守唄』と題した新作による公演を行った。宮内康乃作曲の民謡風な曲想のオリジナル主題歌が流れ、子供の頃の学校生活や遊びの中から蘇ってきたシーンが次々に登場、ベリー・ダンスのシーンも流れの中に自然に溶け込み、夏祭りのような祝祭的空間が立ち現れる賑やかな公演となった。



鳥の劇場演劇祭

また秋には東京以外での公演も相次いだ。まず9月には、鳥取市鹿野町にある鳥の劇場で開かれた演劇祭のショーケースに招かれ、2回にわたる公演を行った。紹介したのはレパートリー作品の『赤い花 白い花』、これまで野和田恵里花さんらも参加して、ブルガリアでも公演したことのある作品で、久々の再演となるものだった。演劇祭であるため参加グループは演劇関係が多かったが、カンパニーのダンスシアターの手法に関心を持つ演劇人も多く、ジャンルを越えた交流はダンサーたちにとってもたいへん刺激的な体験となった。

そして10月、セッションハウスを皮切りに国内巡回の旅公演を実施した。2006年の初演以来ルーマニア、オーストリア、ブルガリアなど海外でも紹介し、今やレパートリー作品としてお馴染みとなった『不思議な場所』を岡山と福岡で上演。マドモアゼル・シネマの独特の作品世界が新鮮な思いで受け止められたようで、地方でのアンケートの回収率も50%を越えた。岡山では鳥の演劇祭で見たという若い女性が2人もいたことは驚きであったが、両地の観客の声をいくつかを紹介する。

「衣裳や映像や出演者の個性がとてもおもしろかった。女性の素敵なところが集まっている感じがしてわくわくした」(26歳女性/自営業)
 「ユニークで斬新で最後になぜか泣けて温かくなりました」(46歳女性/販売)
 「こんな世界は初めて。是非とも多くの人に見せてあげたいです」(47歳女性)
 「新しい身体の動きを発見しました」(23歳女性/学生)
 「疲れを感じさせない、ただ“踊りが好き”というだけに留まらない表現パフォーマンスでした」(24歳女性/フリーター)
 「鳥取で出会いまた見たくて来ました。2度目ですが次も必ず見たい」(24歳女性)
 「脱日常！タイトル通り、不思議な世界に引き込まれ、映画を見ているようでした」(36歳女性/主婦)
 「内容が全てわかったわけではないですが、最後に涙がちょっと出てきました。それは音楽と踊りの万国共通の力でしょう」(30歳/留学生)
 「長い作品、タフな作品、それでもなおおの上なく爽やかなカーテンコール。ダンサーの皆さんが表情豊かで躍動的で且つ魅惑的でした」(男性/劇場関係者)
 「表情豊かで、動きが女性らしくて柔かい。その上に力強さがあり、同姓として応援したくなる」(34歳/バレエ教師)
 「素敵な作品、理由は分かりませんがとても面白く、ここ何年かで一番好きでした。なんだろう。」(男性)

近藤良平インタビュー 「この野郎！」の気持ちで若手ダンサーと共演

「リング企画」は毎年、出演者の選考や企画内容に趣向を凝らして実施しているが、芸術監督の近藤良平に次代を担う若手ダンサー達との共同作業から得るものは何かなどについて、語ってもらった。

Q:「リング企画」は毎回ゲスト出演者とベテランのダンサーと共に若手ダンサーを何人か抜擢してやっていますが、舞台経験の多いベテランだけでなく若手ダンサーを入れることに、どんな思いがあってやっているのでしょうか？

K:大きく分けると理由は2つあります。一般的に若い人の力を借りたいというか、育てたいという気持ちがあるのがまず一番大きいですね。



それは若いといっても年齢でひとくくりで言えるのではなく、実際に大学で学生達にも教えているけれど、セッションハウスに出入りする若い人達と言っても、ダンス経験が浅い人もいますので、年齢だけでは括れない。言ってみれば若手ダンサーというのは、年齢というよりも舞台経験は多くはないけど、フレッシュにものを覚えて動ける人というのかな。そういう人はいてくれると刺激になりますからね。そしてもう一つ突っ込んで言うと、若い人達と一緒にやっていると、「この野郎に負けていられるか」という気持ちに駆り立てられてくるんです。コンドルズでは40代が多くなって、こっちが勝っちゃうんですけど、セッションハウスで若い人達を入れたりすると、動きが早かったりする。それを見ているとこちらが燃えてくる。僕より早く「この野郎！」と。

Q: 要するに舞台経験は浅いけれど、向こうから打ち返してくるものがある？

K: 打ち返してきますね。もちろん一緒にやれる人は、それなりに呼吸を感じあって動けなければ駄目だし、そういう人に限定はされてくると思うんですけど、僕も出していきし向こうも出してくるという関係ですね。一昨年の「リング企画」の時は、まだ僕は少し見守る側に廻っていたんですけど。そして外側からというか照明や音響と同じ役割として演出家として何か作品を見守るという立場にいたような気がする。それを去年の11月の時は大いに出演側に廻ったんですよ。他の人よりか出演シーンが多かったんじゃないかな。いろんなことしたくて、どんどん出てしまったんです。

Q: 一昨年まではまだ見守る立場というか、言うなれば教育的、指導的立場の色合いが強かったけど、今度は共同して創る仲間同士としてやったという感じでしょか？

K: そうですね。そこが大きく変化したところだと思います。なんでこれまでは格好つけて上の立場に立っていたのかなあって。(笑)実際に一緒にやっていて、例えば鈴木拓朗なんかも僕が20代の時聴いたものと同じ音楽を聴いたりする。面白いなあと。聴いている音楽が同じだったりして、そういうのも新鮮ですね。感覚的に共有出来るものがある。

Q: そのようにやってきた延長線にニューヨーク公演があったんでしょうけれど、その体験からどんなことを感じましたか？

K: 初めて僕がニューヨークに公演で行ったのは2000年。その時はコンドルズで行ったんですけど、やはり30分の作品で同じ場所でやったんです。11年ぶりでも感慨深いものがありました。その時はコンドルズを結成して4、5年で、初めての海外ツアーでドキドキものでした。今回は2011年になってすぐに行ったんですけど、やっぱりドキドキしました。11年経って行った僕がドキドキするのですから、皆もすごくドキドキしているんだろうなあと。何か一つのゲームみたいで面白かったですね。人が集まって作品を創る、それが何かのきっかけで海外まで持っていったところに行き着く。もともとセッションハウスでしか見せていなかった作品を、ひょんなことからニューヨークのジャパン・ソサエティという劇場で姿を変えて見せることになる、面白いなあと。ここでやった時から1年ちょっとしか経っていないけど、皆うまくいったような気がします。うまくなるってどういう意味なんだろうと考えますが、そういう経



リング企画「麗しき山羊たち」

験がステップアップするきっかけになるんだろうと思いますね。

Q: コンドルズのメンバーもかつてはそうだったのかな？

K: そうだったと思う。今はそういうことも言われもしなくなっているけれど、たまたま昔のコンドルズのビデオを見ていたら、カーテンコールでも目頭熱くして「ありがとうございました」と言っていましたからね。うるうる状態だね。(笑)そういう時期ってあったんだなって。感無量になりますね。

Q: これからも若い人達と一緒にやっていくということには変わりはないですか？

K: 変わらないし、最初に言ったのと同じかも知れないけれど、まだ蚊帳の外にいたくない。自分がちょっと間違えても、近藤さんが言うことは正しいと思われたりしてはやばい。まだまだ取まりたくないですね。蓋閉めたくても閉まらない、そういう存在がいいですよ。

Q: ただ教えるとか指導するというのではなくてね。

K: そうですね。

Q: 去年の暮れ、笠井叡さんと瑞丈君が踊った時に、叡さんは68歳になっても、この野郎みたいどころあるんですね。息子にも対抗意識持ってますとはっきりおっしゃる。

K: 僕も笠井さんから学ぶこと多いし、笠井さんが「この野郎」と言えるんだったら、僕も「この野郎」と言っていだろし。この前、岡本太郎生誕100年とかで岡本さんの本を見てたんですけど、この人って本当に今も生きてるなあと、「芸術は爆発だ！」と今読んでこの人同時代の人だなあと感じてすごくいい。行動力に隙がない。ふわふわしているわけにはいかないなあと感じますね。

松本大樹一問一答 共同作業で伝えていくものは・・・

香港のダンサー王延琳(アンディ・ウォン)と10年プロジェクトのデュエット・ダンスを続けている松本大樹は、2010年もレジデンス・アーティスト公演「3」で息の合ったパフォーマンスを見せてくれた。その一方、彼は毎週ダンス・クラスの講師を勤め後進の指導にあたっており、「ダンス専科」などでレッスン生による作品を発表し続けている。その彼に教えることで後輩ダンサー達に伝えていきたいことは何かを聞いてみた。

Q: 大樹さんがセッションハウスで教え始めて8年ほどになりますが、毎週教えていて、2006年から「ダンス専科」などでレッスン生達と作品を発表してきている。2007年、8年と続けてきていて、今年もまた大樹さんが振付をしますね。大樹さんがその作業をしながら次の世代の人達にどんなことを伝えていきたいと思っていますか？

M: 伝えていきたいことはあります。ただ自分が伝えるというだけでなく、彼らがリハーサルから本番へと向かっていく段階で自分を見つめ直しているでしょうし、彼等のその本番に向けて歩いていく姿から僕が逆にフィードバックを受けとることが沢山あります。ぼくは多分その入口を提案したり、彼等がそれを噛み砕いてどう本番に向かっていくかを見つめながら、気づいていない点とか見失いそうな点というのがあったら、ぼくがそれを言葉にして語りかけたりします。そして彼等の集中力を借りて一緒に行動することによって、彼等と一緒に上っていけるようになってきていますね。そうすると教えることも共同作業だし、リハーサルも共同作業になってくる。ただ自分はたたき台なりを提案してリードはするけれど、共同でダンスを研究するという意識を持つようになってからは、一方通行ではないので教



えることもいっそう楽しいものになりました。

Q: そのような過程の中から、例えば三浦香織さんのようにレッスン生も2009年に「ダンス専科」で振付・演出を担当しました。彼等も自分達で振付・演出出来る力をつけてきているわけですね。

M: そうですね。自分が歩んできたこれまでのことから考えるのは、レッスン生たちには自発的に何か判断出来るようなダンサーであってほしいとすごく思います。僕はこれまであまりスパルタ的な教えをする所とかカンパニーには長居したことがないので、どの現場に行ってもそこで求められていることは何だろうと自発的に判断しなければいけなかったし、フリーでやっていく以上テクニックと経験知を使って、要点が嗅ぎ分けられるようにならなければならない。僕が言えるのはそのことだけです。ですから本番に向けてリハーサルする時も、今悩んでいることは何か、この瞬間の作業を効率的に進めていくにはどうしたらよいかなどを、自発的に考えて分かるようになってほしいと思います。ですから振付作業をする時に注意力がなかったりする場合は、今何をやろうとしているのって聞きますね。後は足をよく上げることが出来るかどうかといったテクニック的なことは、自分で判断してバレエやジャズダンスなどのクラスに行って学ばないといけません。そうしたことも気づいて一人ひとりが自発的に行動出来るダンサーであってほしい。そうすればダンスをやったただ汗をかくだけの作業にとどまらず、経験を積んでいけば30歳、40歳になってきた時に深い問題意識を持てるようになると思います。そんなことを伝えていきたいですね。

ピナ・バウシュからの継承と創造 ジャン・サスポーテスの挑戦

ピナ・バウシュの創作はダンサーに質問することから始まったと言われている。一人ひとりが辿ってきた歴史や記憶を引き出し、それを基に作品を構築していくもので、2010年8月に行ったジャン・ローラン・サスポーテスのクリエイションWSも19名の参加ダンサーへの問いかけから始まった。そして受講生からの質問への答えは、身ぶりであったり、言葉であったり、情景描写であったりさまざま、数多く出てきたそれらの答えから、観客の共感を呼び普遍性があると思われる題材を抽出し、構成していくものだった。作品のタイトルは『The Waltz of Life』。私達が日常の中で遭遇するささやかな情景から生まれてくるシーンの数々は、人間存在のおかしさや哀しさを表現していて、演劇的な要素の強いシーンと激しく踊るダンス・シーンとが相まって見る人にも親しみの持てる舞台となった。

そしてかねがね日本文化に深い関心を寄せていたサスポーテス氏は今回、日本語特有の「ドキドキ」とか「テクテク」といった擬声音(オノマトペ)の面白さに注目、参加者達にさまざまな擬声音を発語させながら動きを作っていったのは、普段は私達が何気なく使っている日本語の持つ魅力を見直す機会ともなった。ピナも日本で公演する時は、ダンサー達に断片的な日本語の台詞を言わせ舞台を身近なものに感じさせてきたが、サスポーテス氏が日本人参加者を通し言葉と動きとの関係を重視する方法を更に積極的に推し進めてきたことは、ダンスシアターへの理解と異文化交流を深化させる視点からみても意欲的な挑戦だったように思われる。

氏が実践するダンスシアターの方法は、振付家から振りを与えられるものとは全く異なり、ダンサー達には毎日多くの課題を与えられ考えていかなければならなかったことから、最初とはまどいもあっ



たようだ。しかしワークを進めていくにつれ、参加者一人ひとりが頭を使って創っていくことの大切さを感じとり、擬声音に関しても普段は意識せずに使っている日本語の面白さを見直す貴重なきっかけになったとの声が多く聞かれた。

このようにサスポーテス氏をはじめ、没後一年ピナの遺志を継承していくというダンサー達の地道な活動が既に始まっている。きっとピナは草場の陰から彼らのワークを、穏やかな眼差しの中にちょっといたずらっ子のような笑みを浮かべて見守っていることだろう。

イスラエルでダンスを学ぶの記

塩野入一代

東京女子体育大学でダンスを学び、セッションハウスでも数多くの舞台を踏んだ塩野入一代は現在、文化庁の海外研修生としてイスラエルに留学中。コンテンポラリー・ダンスの盛んな同国でどのようなことを学び、感じ取っているのか、留学記を寄せてもらった。



私は2010年9月から文化庁新進芸術家海外研修制度により、イスラエルで活動しています。英語も拙い人間がヘブライ語とアラビア語を公用語とする国でどんなことができるのか想像が付きませんでした。その様な状況の中で現在まで、身体表現、パペットなど様々なWSへの参加、リハーサルでの代役やオブザーバー、舞台美術制作、所属ダンサーとのデュオ作品制作などを行ってきました。また、Givat Ram 大学Rubin Dance and Music AcademyでWSを行い、一般の方に向けてヨガなども教えています。

セッションハウスとも関係の深いパフォーマンスアート集団【Clipa Theater】での、クリエイションやリハーサルでは、彼らの奇抜で独特なアイデアに毎度肝を抜かれています。身近にあるもので独創的な舞台美術を次々に生み出したり、身体のみならず照明、音響、舞台美術など様々な角度から独創的なアイデアを出したりする様は「ダンス」という枠に囚われている私の固定概念をどんどん壊していきます。クリエイションでの自分のアイデアの乏しさを毎回痛感させられています。

私生活では若手芸術家が多いエリアに住んでいる為、グラフィックデザインや建築、音楽、演劇など様々な分野の芸術について触れることができます。即興でコラボレートする機会が日常にある魅力的な場所です。そして私の言語力でも様々な活動が行えているのは、イスラエルという国が持つ攻撃的なイメージとは裏腹に、1人1人がとても親切で暖かみのある方が多いことに感じています。自転車が壊れば声をかけて修理してくれたり、バスで隣の席になれば楽しく会話してくれたり、とても気さくでオープンな国民性が私に合っていて、私を助けてくれているようです。

研修先での活動はもちろんのこと、自然や自分の身体をみつめる機会が増えたこと、思想の違いや価値観の違いを共有すること、人とのふれあいなどイスラエルで過ごした日々によって自分の思想や価値観の変化を大きく感じています。これらの経験は、今後の作品創作に大きく影響するであろうことを予感しています。さらに私の中にある人生観にも大きな変化をもたらしました。日本を離れることで日本、日本人の持つ良さもわかりました。

研修も残り半分、これから6月のイスラエルダンスフェスティバルに向けて新作のクリエイションとパフォーマンスを行っていきます。何を共に生み出していけるのか、どんな自分が生まれるのか今から楽しみでなりません。

富野幸緒、丹羽洋子、田中ノエル



国枝昌人、井田亜彩実



山崎麻衣子、渡辺久美子



井神さゆり



古園井美果



2010年の記録

松尾愛美グループ



アンディ・ウォン、松本大樹



川口隆夫



マドモアゼル・シネマ WSグループ



鈴木拓朗



長内裕美



UDC (ユニバーシティ・ダンス・クロス)

ダンス・プログラムを支えたセッションハウス企画室スタッフ

照明：石関美穂、加藤 泉、鈴村 淳、菊池伸枝 / 音響：上田道崇、相川 貴、宮内康乃 / 舞台監督：伊達麻衣子 / 映像：瀧島弘義 / 技術指導：関根一郎 / プログラム・ディレクター：伊藤直子 / 制作：伊藤 孝、鍋島敬子、佐々木清子 / 会場スタッフ：時 悦子、栗原晶子、樽松朝子、相原美紀、竹之下たまみ、大島菜央、伊藤茉野、佐々木さやか、徳永 梓、新堀佳奈、鍋島峻介

ガーデン活動報告

セッションハウスの2階にあるギャラリー【ガーデン】は、2010年も自主企画・共同企画の他、レンタルの展覧会、演劇や朗読、ダンス公演、クロッキー会など多岐にわたる活動の場となった。

自主及び共同企画の軌跡

- 3月20日(土)～29日(月) 渡辺一枝写真展
「チベットのはなしをしよう」
- 5月13日(木)～24日(月) ツーゼ・マイヤー展
「Days of Innocence and Joy」
- 7月2日(金)～11日(日) 原田文明
「ドローイングインスタレーション」展
- 8月11日(水)～15日(日) 原田松野展「シャツの風景」
- 10月12日(火)～20日(水) 7 (seven) 展
浅野光彦、瀬戸栄美子、永井庸介、野澤義宣、長谷川信夫、広瀬創、桃太郎
- 11月21日(日)～30日(火) 「WARABE 2010 童心・アートの行」
麻田昭作、井上清一、井上英子、小松稔、島村俊和、丹野有美子、鍋島次雄、
長谷川千賀子、星野健司、牟田口努
- 12月25日(土)、26日(日) 「ブランカのたりたり人生」
写真展と一人芝居

※1996年の開始以来14年目となるダンサーをモデルにしたクロッキー会(主宰：丹野有美子)は2010年も20回開催された。



2010年の展覧会の中で、井上清一氏らの彫刻と平面作品によるグループ展や山口県岩国市在住の原田文明による炭化した自然木と紙を用いたドローイングインスタレーション展は、空間全体の演出を意識したもので、画廊を異次元の世界に導く展示となった。原田氏はこれまでに地域の人たちと共に「錦帯橋プロジェクト」や「キッズパワープロジェクト」などさまざまなアートムーブメントに取り組みダンス公演などもサポートしてきた作家で、今回の展覧会もアートは内向的な次元にとどまらず日常と非日常を往復しながら外の世界に向けて広く発信していくべきだということを如実に示すものとして注目をあびた。

個展とアートエネルギーについて

原田文明

地方にいて、これまで精神風土をつくることを最強のアートと考え、地域ぐるみで各種アートプロジェクトに取り組んできた。美術家としては矛盾するかもしれないけれど、造形的のみで有形の作品とは異なる、いわば運動としか言いようのない「無形のアート」があっただけではないかと思っていた。つまり、文化的な土壌とでも言えるのか、それを培う精神的な風土のようなものができないか。と。また、その取り組みが行政と一体となった地域の住民(市民)運動として継続され根づいていくことを夢みながら、作家としての創作活動を平衡して展開し個展や各地の美術コンペに出品してきた。

東京での個展は10数年ぶりだったが、展覧会では、多くの美術関係者や同じようなプロジェクトに関わって活動している作家、それを



サポートする方々にもお会いし励ましを受けた。最終日には、「アートムーヴ2003」や「アートフォーラム2006」などの他、岩国のぼくたちともお馴染みのコントラバス奏者の齋藤徹さんと即興的なライブまで仕出かしてしまい、本気で遊ぶ齋藤さんとのプレイからとてもいい刺激を受けた。

今回の作品に対して不思議だったのは、30年前に東京で発表した「from the nothing」の作品と共通したものを感じたことだった。制作意図(コンセプト)が全く違っているにも拘らず、どこか類似した点があるとすればそれはどういうことなのだろう。30年を経て、それなりに頑張ってきたつもりだったが、大して進化していないということなのか。それとも無意識のところにつながっているものこそが本質的なものであると結論づけられるのか。この事実にも多少の戸惑いを覚えながらも、ぼくは大きな課題を与えられたような気がした。

また、ギャラリーのあり方と可能性について、もっとアグレッシブで多様な運営スタイルがあっただけでなく痛切に感じた。つまり、欧米中心の価値が失われアートの多様化が求められる現状をふまえてみれば、従来の中央集権的なギャラリーの役割とは違う可能性とアプローチが求められていると思うからだ。換言すれば、欧米に対してアジアがあっただけでなく、中央に対して地方があっただけでなく、もはや東京も世界の地方として振舞うほかないということかもしれない。

◆◆◆編集後記◆◆◆

つい先頃のことが、30年に及んだエジプトのムバラク政権が崩壊した。チュニジアに始まり、リビアにまで波及した中東諸国の革命の変動は、市民たちがインターネットを使って情報を交換する中から始まったと言われている。ただそれも情報交換するだけで起こったことでは決してない。市民たちがその呼びかけに応じて街頭に繰り出し広場に集まる、つまりは一人ひとりの市民が生身をさらし、他の人々と出会い触れ合うことなしにはこの変革は起こりえないことだった。

このことは情報革命が加速化して仮想現実が席卷する中であっても、事を起こし状況を変えていくのはあくまで生身の人間の動きであるという当たり前のことを実証しているように思われる。笠井叡さんが瑞丈君との公演後のトークで、コンピューターが全部やってくれるような文化の中で観客に生身をさらしていくダンスの役割の大切さを語っていたのは、たいへん示唆的なことである。また、先のアジア杯サッカーの数々の試合で、手に汗握る攻防を繰り返した選手たちの活躍が多くの人を魅了したのも、生身の肉体あってこそのものであった。

そして人の気持ちを揺り動かすことは、その生身の体が見る人々、接する人々に向かって開かれたものでなくては成立しないことを、同時に肝に銘じておく必要があるだろう。自己表現の領域に止まることなく人々に開かれたダンスやアートをどのようにしたら実現させることが出来るのか。セッションハウスが20周年を迎えた今年、私たちは人となりが響きあうダンスやアートの約束事を探るプロジェクトに取り組んでいこうと考えている。(T.I)

編集：セッションハウス企画室(伊藤 孝、上田道崇)
写真：伊藤 孝
発行：〒162-0805 東京都新宿区矢来町158 セッションハウス
TEL. 03-3266-0461 FAX. 03-3266-0772 E-mail: mail@session-house.net
URL: www.session-house.net